

北海道の演劇 — 久保栄・有島武郎らを巡って —

北翔大学北方圏学術情報センター ポルト 市民講座の実践を通して

森 一生

北海道の演劇作品を読む 3リーディングから上演まで
北海道ゆかりの作家の演劇作品を読む。各期三回完結で、三期実施し、各期の三回目は公開発表
とし、希望者はスタッフとともにポルトホールでのリーディング発表会（照明・音響入り！）に参
加することが出来る。このような形式で行ったポルト市民講座の報告です。

一 第一期（九月二日、九月二八日、九月三日）

〈本山節彌の作品から〉

数々の高校演劇作品や北海道の創作劇を創造した本山
節彌の作品から『ステージメルヘン どころこ花子』を
読んで（リーディングして）みよう。

①本山節彌の創作劇は

- ▽札幌静修高校時代 『カムイヌプリ』『あひるのっぺ』
- 『北の浜っ子』『新しい出発』『山沼に誓う』『移民』『聖
者の行進』『デブ子』『カムイオイナ』『OS』——など。
- ▽啓北商業高校（定）時代 『月蝕と夜学生』『ダイヤ
ガラス』『卒業延期』『オホーツクのわらすっこ』（高
校演劇全国大会最優秀賞）『閉山』『鍛冶』——など。
- ▽開成高校時代 『のら犬』『黄色のトマト』『イゼル
ギリ婆さん』『KEMKA KARIIP』『都会の森
の物語』『大きな木』（高校演劇全国大会最優秀賞）『雪
の遺書』『水仙月の四日』（高校演劇全国大会最優秀
賞）『愛の手紙』『石うすの歌』『赤じょう』『クイー

ン』『コスモス・ホテル』『そしてトンキーも死んだ』
『ゼロ弾きのゴージュ』——など。

▽高校演劇（高文連）・中学校演劇（中文連）のため
に『銀河鉄道の夜』からす太郎』『はるにれと少年』
——など

▽一般演劇（劇団「青の会」「札幌演劇協会」劇団「森
の会」等）のために『オホーツクの女』『日本刀』『ネ
オ・ホツカイドウ』『あめりか礁物語』『どころこ花
子』『女工節』『新狂言 女鬼』『焚き木の SOS』『音
楽舞踊劇・イゼルギリ婆さん』『ホルのいた森』『浜
茄子紅き磯辺にも』（今年、二〇一四年創作）——
などがある。

どの作品も、北海道に根ざした骨太な作品ばかりであ
る。

②こうした数々の名作を本山は残し、現在も活躍してい
る。しかし、いま、高校演劇や一般演劇で再演される

ことはほとんど無く、その演劇作品に触れる機会は今全く「無い」に等しいと言ってもいいだろう。

③『ステージメルヘン どころこ花子』は、一九六八(昭和四三)年八月二十九日。八トン積み的大型トラックが、小樽港から象一頭と駝鳥一羽を積んで、旭川・旭山動物園に運んだ。だが、そのトラックには、大きな木枠を利用しての「かえり荷物」があった。メスのインド象。「眼、眼光に光沢なし」前足、関節各部に「ケル病」が診られる。「子供たちの目に触れないように密かに払い下げられた」剥製になる寸前の象(花子)である。札幌の郊外、この「ケル病」の象と、その命を懸命に守ろうと格闘する「父さん」の「でっかい愛」の物語が『ステージメルヘン どころこ花子』である。

父さん 「花子、北海道は夏の次に冬が来る。冬は雪が降って寒いんだ。お前が生まれたタイやインドと違う。下の町とも違う。何もかんもしばれてしまう。体力をつけておかないばとも冬を越せないっ。絶対に無理なんだ。わかるか。わかるべ。―体力をつけるためには歩かねばならない。人だって、象だっておんなじだ。歩く為には立たねばならない。わかるか。わかるべ。立たないば死なねばならない。わかるか。わかるべ。生きるか死ぬかは花子、花子自身で決めれ。――

風土に生きる〈愛〉と〈自立〉の物語でもあると言っているだろう。戯曲を読み、「文字」から得た世界を「立

体化」し、こうした作品の「核」や作者の「思い」に直接触れることも演劇作品を読む喜びの一つにしたいものである。

二 第二期(一〇月九日、一〇月十六日、一〇月二〇日)

有島武郎の青春舞台は北海道(札幌)であった。そして、有島は「北海道文学の『正統』である」と言われている。小説には、『生まれ出づる悩み』『カインの末裔』『星座』『或る女』などがあるが、学校教育では「文学史」で取り上げられる程度で、注目度は低いといえよう。しかし、『カインの末裔』は、小林多喜二の『防雪林』や伊藤整の『馬喰の果て』や本庄陸男の『石狩川』、島木健作『生活の探求』、そして、久保菜の『火山灰地』に大きな影響を与えたと言われている。まさに、北海道文学の『正統』と言ってもいいのである。

有島には、劇作家としてのもう一つの顔がある。つまり、創作・第一作は戯曲『老船長の幻覚』であり、最期の作品は、「死」の一ヶ月ほど前に書かれた戯曲『独断者の会話』である。そして、有島は、生涯に十一本もの戯曲を書いたと言われている。これらの戯曲に触れ、朗読(リーディング)してみよう。

①一〇月九日

小説『カインの末裔』の冒頭部分とそれをラジオドラマ化した台本を読み比べ、有島が思い描いていた作品世界を感じ取ってみよう。

狩太(現、ニセコ)の有島農場(四四〇町歩)を「共

生農場」として農民（小作人）に開放した有島の世界と北海道の風土と描かれている人々（農民たち）を「立体化」して受け止めてみる。

② 一〇月一六日

・ 有島武郎の戯曲作品と演劇との関わり。そのⅠ（略）

・ 創作・第一作『老船長の幻覚』（一九一〇年）――

最期の創作『独断者の会話』（一九二三年）

その間に書かれた戯曲（『小さい夢』『サムソンとデリラ』『洪水の前』『死と其前後』『奇跡の唄』『聖餐』（三部曲）『御柱』『ドモ又の死』『断橋』の特徴。

・ 『老船長の幻覚』のドラマ性と有島武郎――

・ 『御柱』『ドモ又の死』『断橋』について

・ 『御柱』（その一部を）読んでみよう。

③ 一〇月二〇日

・ 有島武郎の戯曲作品と演劇との関わり。そのⅡ（略）

・ 『御柱』『ドモ又の死』『断橋』三作品のドラマ性について。

・ 『御柱』（その一部をリーディングとして）読んでみよう。

『御柱』は、一幕ものであるが、（西洋）古典的な手法（三角構図）で書かれているといわれている。

話は火事をめぐって展開する。二年もかけてした仕事が一夜のうちに灰になってしまう。火事は「付け火」らしい。誰が、何ゆえに「付け火」したのか。この解明がドラマを引っ張ってゆく。

「信州からほっと出の彫り物大工づれに、江戸の大工が引けを取って引っ込んでいられるかい」――と啖

呵をきる（江戸職人）嘉助と「口の先ではなんとも云え、手前づれが俺と肩を並べられる大工かそうでないか、胸に手を当てて思案してみろ――たわけたこんだわ――末代までも国の宝とならうづものを、手前はよくも一晩の中に灰にしたな」――怒る平四郎。この二人が（ドラマの）主人公である。

ドラマは、嘉助の登場までが「発端」部であり、平四郎の家族（久和蔵・お初）によっておおかたの伏線がはられ、嘉助と平四郎との対決がクライマックスを形成し、嘉助の退場とともに収束に向かう。

場所は、平四郎の寝起きする家。ときは、朝のひと時。筋は、平四郎と嘉助の職人魂。――（西洋古典の）「三一致」が守られている構成である。

有島は、この『御柱』を創作する時、藤森成吉や吹田順助、足助素一、中川一政、里見弾、らを招いて「朗読」をし、意見を聞いたという。

「朗読」は、他者に聞かせると同時に、――他ならない自分の声を通して――（自分もまた）聴くということであり、「立体化」されて「作者に（再び）迫ってくるものである。（有島は『ドモ又の死』『断橋』の創作過程でも友人たちを招き、「朗読」したという。――井上理恵『境界のドラマ』有島武郎の戯曲）百二〇頁）

有島武郎のいくつかの作品に触れてみると、「（自分ひとりでではなく）『他人とともに』救われる」「他人とともに救われるための『共感力』」「他人が置かれた『環境』（立場）を想像できる『力』」――こういったテーマが迫っ

てくる。
有島武郎が現代の我々に「問いかけるもの」と言っている。いいだろう。

三 第三期（十一月二〇日、十一月二七日、十二月一日）

〈久保菜とその戯曲『林檎園日記』を読む〉

① 十一月二〇日

久保菜という人 久保菜の仕事は、i 劇作、ii 演出、iii 演劇論、iv 北海道に大きく与えた影響、の四つに大別することが出来る。

劇作では、北海道にゆかりのある作品、明治維新の社会の動きを、国際的な規模のもとに幅広く描いたといわれる『五稜郭血書』。

十勝・帯広周辺の農業試験場や炭焼き場、農場を舞台に、寒冷地農業の確立を説く自然科学者の試験場長を軸に、農民、学界、血縁、国策資本が複雑に絡み合う壮大なドラマである『火山灰地』。

札幌市郊外・平岸の林檎園を舞台に、没落してゆく戦時下の果樹園経営者とその（作家希望の）弟の生き方・人としてのあり方を描いた『林檎園日記』。

久保の祖父が創業し、父が引き継いだ野幌（現・江別市）のレンガ工場を舞台に、日本の近代社会が、世界的情勢にゆり動かされながら、二〇世紀後半の間にたどったその道筋を、レンガ工場の浮き沈みを通して、労務者、技術者、経営者、大資本家、そして、「軍」との関係において描こうとした小説『ロマン』の『のぼり窯』などがある。（他に『新説国姓爺合戦』『漁民』『中

国湖南省』『古野の盗賊』『日本の気象』などがある。）
演出・演劇論では、戦前、戦中、築地小劇場（文芸云部）に入り、小山内薫、土方与志らと、ドイツ自然主義演劇や表現主義演劇を研究。わが国演劇界の代表的（演劇）理論家として、ソビエトをはじめとする世界の新しい演劇の導入、紹介をはじめ、リアリズム演劇論を通じて「典型的な境遇のなかに、典型的な性格を描く——リアリズムを主張した」といわれている。（このことについては、改めて考察する必要がある。と私（森）は思っている）

久保は晩年、演劇創造の第一線からその身を引いたが、一九五六年一〇月、（長光太らと）「HBC（北海道放送）演劇研究所」で、自作の「こわれ甕」をテキストに演技指導を行なっている。このときの久保の緻密、周到な指導は、草創期の（民間）テレビ放送にかかわった創造者たちの語り草になっている。また、前後するが、一九五一年、帯広の自立劇団が『火山灰地』の上演許可を依頼した時、久保は、「——皆さんが力を合わせて、地元的生活に密着した作品を生み出されること、あなたの方のお仕事の本来の使命なのではないか」といつている。つまり、地域に根ざした創造性を熱く主張した。久保は、東京に住んで、北海道を描いたが、そこには少しの〈隔たり〉も無かったと言えよう。

② 十一月二七日

『火山灰地』という作品 「日本の北の涯の農業都市／＼どこよりも雪解けが遅く／＼どこよりも霜の早く来る平原のなかに／＼ちようど皷だらけの農民の掌にのった

／一粒の穀物のように小さな市。――

冷害／飢饉／凶作／水害／自然と人間とがつくり出す脅威にさらされながら／しかし土に棲む人びとは／荒地地の石の下からも芽生える／名なし草のように生きてゆく。

劇は／この市と／この農村とを中心に／――」

初演当時、第一部の幕開き前、俳優・宇野重吉が（炭焼き・泉 次郎役）百姓姿で朗読する部分である。

この壮大なドラマのテーマである。

第一部、（第一幕）「歳の市」、（第二幕）「新年会」、（第三幕）「かま前検査」、（第四幕）「試験島」

第二部、（第五幕）「製線所」、（第六幕）「部落まつり」昼と夜、（第七幕）「前夜」

第二部・七幕の超大作である。第一部、四幕で約四時間。第二部、三幕で約四時間。

登場人物は、約六〇名。（「歳の市」や「部落まつり」の登場人物を加えると約一〇〇人ほどになる）であるから、上演が大変困難である。（大道具が七場面。一部二部を通して上演することは時間的に難しく。過去の公演はどの場合も、一部・二部に分けて公演。さらに、約一〇〇名に及ぶキャストの確保、スタッフの確保、稽古場の確保、――等々）

このこともあって、過去四度しか公演されていない。

i 一九三八年六月から七月 新協劇団（初演）

ii 一九六一年から一九六二年 劇団民芸（久保栄記念公演）

iii 一九七八年（第一部）と一九八〇年（第二部）

石狩高校生合同公演

iv 二〇〇五年一月から（第一部）、三月から（第二部）
劇団民芸（創立五十五周年記念公演）

このように過去四度しか公演されていないが、六一年の劇団民芸の公演（演出・村山知義）では、資料によると、相当に「カット（テキストトレジャー）」したと言われているし、〇五年の公演（演出・内山鶴）でも、時間的に、カットは免れなかった――といわれている。従って、全篇を原作どおりに上演したのは、初演と北海道の石狩高校生による合同公演のみと言うことになる。演劇研究家・吉備国際大学教授・井上理恵は、「札幌の高校生と教員とが『火山灰地』上演チームを作って上演――。（略）わたくしは第二部のみ見ることができた。熱気の溢れた見事な舞台であった。」と評している。（『火山灰地』二〇〇四発行・新宿書房

『火山灰地』 解題三二―三三頁）

観客はこの劇をどの様に受けとめたのだろうか。

初演・一九三八（昭和一三）年七月、第二部の千秋楽の晩、連日満員を続けた築地小劇場の幕がするすると降りた瞬間、ちよび髭のおっさんが立ち上がって「日本の演劇芸術と新協劇団バンザイ」と叫んだことを出演者であった、滝沢修、宇野重吉、千谷道雄らは聞いている。（回想――『久保栄研究』）

このエピソードは、この作品の上演が当時の観客に与えた感動が「異常」なものであったことを物語っている。この声の持ち主・西山国四郎さんは「当時、神田の酒屋のおやじであった私は――だんだんと社会が

暗く、まるでトンネルの奥へ奥へと入り込んでゆくようなあの時点において、私たちは丁度、屠殺場へ列を組んで追いやられる牛か馬かという情勢でした。その時に火山灰地の上演で、私たちはこれから当分の間このような劇は見られないと言う心境にあったのではないのでしょうか。」と言った。

また、政治学者の丸山真男（当時二四歳）は「その年からメーデーも永久禁止となり、労働組合の内部にも産報運動がすさまじく進行しはじめた。日支事変はとめどもなく拡大して行く。こういった重苦しい雰囲気の中で、あの芝居が上演されたわけです。僕など社会科学の前途をすっかり悲観していた折だけに、兩宮の科学者として良心を貫こうとする態度が実際こたえたですよ。だから劇の構成や演技を批判するというようなことは二の次となり、見ていて、ただ涙もなく涙が出たことを覚えています」と回想している。また、映画評論家・瓜生忠夫（当時二三歳）は、「現在、僕の思想がもし左翼的であるとするならば、それはハッキリ『火山灰地』の影響だといえるんです。——これは科学と芸術の詩的形象における統一が実に明らか具体的な持って、当時の僕の全精神だけでなく、僕的全存在を捉えたからだと思う」と言う。（久保栄著『火山灰地』付録 二〇〇四年発行 新宿書房）

「知」の継承・「感動体験」の継承という点で示唆するものが大きいと思う。

『火山灰地』登場人物の横顔
農業実験場・製麻会社 精糖会社と農民たちとを結ぶ
「逸見」しの

農業科学者である父（滝本）とその弟子である夫（兩宮聡）——息子・徹との（娘であり、妻であり、母である）「（兩宮）照子」

不在地主と農民との軋轢のなかで壮絶に生きる「（駒井）ツタ」

家長制社会のなかで女の「負」の面を持つが明るく生きる「（船津）まつえ」

精米所の娘、精糖会社の事務所に勤め、自分を鞭打つ知的な農村婦人「（足立）キミ」

純真無垢な娘「（兩宮）玲子」

泉 次郎・市橋達治・逸見庄作・関 為吉・駒井子之吉（農民たち）

青木良衛・唐沢克己・辻章平・コパンコフ（一般庶民）
こうした人々が、縦糸、横糸を紡ぎながらこのドラマを展開してゆく。

③ 二月一日

久保は、一九四〇（昭和一五）年八月いわゆる「新劇事件」によって「検拳」され、（所屬していた）「新協劇団」は解散させられる。年末にはいったんは保釈されるが、以後、仕事を禁じられ、敗戦まで公的活動から遠ざけられていた。「——何とかして筆を汚さずに、ここ何年かの嵐をやり過ごそう。しかもその期間を、仕事の上で空白にすまい。——」と構想を練り、敗戦後、新たな「戦後の地平」から書いたのが『林檎園日記』である。久保は、『林檎園日記』の僕の創作上のテーマは、文化人芸術家の戦争責任です。このテーマを生産部面を描くことに関連を持たせながら書いていった。（『林檎園日記を書くまで』）といい、「言わ

ば『林檎園日記』は、大東亜理念に対する私の無力なレジスタンスの記念品の一つである」(『林檎園日記』あとがき)と言っている。

・『林檎園日記』第二幕を朗読(リーディング)してみるとき
日中事変のころ

ところ 北方の或る都会の郊外に、地味の関係で、大小さまざまな林檎園が密集して、美しい一廓を形づくっているなかの安倍林檎園。舞台は、園内の古びた家のなか。表口へつづく土間と、林檎畑に通う土間とに挿まれて、ポンプ井戸やストーヴのある台所と、囲炉裏を切った茶の間と、障子の奥のもう一つの部屋と、二階へ上がる梯子段の口と。

配役

壽々(安倍林檎園の初代の園主の娘。二代目園主の妻。)

正義(安倍林檎園の三代目の園主) 大坪久美子

信胤(壽々の次男。無名作家) 櫻井幹次郎

道子(正義の娘。題名の日記は彼女がつけている) 黒木 滯

継男(正義の息子。) 宮崎僚也

源三郎(遊佐林檎園の三代目の園主。信胤と同年輩) 工藤 剛

今朝吉(安倍林檎園の常雇い人夫。川西姓。) 村松幹男

トメ(同じく常雇い人夫。櫻井姓。) 平井伸之

再び井上理恵の(『ドラマ解説』社会評論社 戦争

が肯定された時代との出会い 久保栄 没後三十年のことばを借りてこの講座が〈目指した〉〈真意〉としたい。

「略」『体験は、体験しなかった人間と出会わなければならぬ。体験は、体験しなかった人間と出会い、語られ、討論されることによって、はじめて体験者にとつても非体験者にとつても、真に体験として生きはじめる』——(略)

かつて『火山灰地』の久保栄といえば通じたのであるが、いまでは演劇青年たちにも通じなくなつた。『久保栄全集』は絶版となり、(略)安価で簡単に入手できた戯曲や評論も姿を消し、図書館か古本屋で久保栄の名前を探して読む以外ほとんど手にすることが出来なくなっている。こうした現象は一人久保だけのことではなく、一九三〇年代に活躍した作家たちはみな似たような扱いを受けている。不当としか言いようのない現象であるが、これは彼らの体験が未だ体験しなかつた人々と出会う機会を、誰かが奪っていると言つても過言ではないだろう。私たちはあるいは『生きられていた瞬間の闇』の中にどつぷりと浸かされているのかも知れない。

そうしたことを考慮すると(略)戦争が肯定され推進されていた時代に生きた人々の体験と出会う機会を与えてくれたことになる。かつて帯広の町で、音更の村で、さらにはオサルシ沢で、非体験者である久保がそこに生きる人々の体験に出会い、語つたことで彼らの体験が真に体験として生き続けたように、私たちは久保栄の体験に命を与えなければならぬであろう。」